流通する名前

『互いの友』における見せかけの社会と個人

佐取愛香

1. はじめに

1864 年から 65 年に月間分冊の形で出版された『互いの友』（*Our Mutual Friend*）はチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）最後の完成した小説である。J. ヒリス・ミラー（J. Hillis Miller）が「20 世紀の幕開け」と評価した本作品には、二項対立では捉えきれない真実と虚構あるいは表層と本質の関係性や、商品化（commodification）の問題が現れている（293）。他方で、ベラ・ウィルファー（Bella Wilfer）の本質が明らかになることで成立する愛情に基づいた結婚という結末に帰着する本作品はむしろ 19 世紀的な価値観を提示する典型的な作品であるともいえる。本発表では『互いの友』に描かれるミドル・クラスの社会とそれを形成する過程で生じる個人の商品化という現象に着目することで、これまで多くの批判にさらされてきた結末の再解釈を試み、本作品には 1860 年代中頃の社会に対するディケンズの認識と反応が反映されていることを示す。

2. ミドル・クラスの見せかけの社会

『互いの友』に描かれるミドル・クラスの社会とは表層的な見せかけの関係性で構築されている。本作品における真実と虚構の関係性については、すでにいくつかの先行研究で論じられている。例えば、U. C. クネップフルマッハー（U. C Knoepflmacher）は『互いの友』でディケンズは現実と非現実の表裏一体性を読者に説いていると主張した。一方で、筒井瑞貴は本作品において真実と虚構の関係性は解釈の問題として提示されていると指摘した。しかし、ヴェニアリング（Veneering）を中心とするミドル・クラスの社会に着目すると、彼らの社会は先行研究が論じているように本質と虚構の区別が曖昧であるというよりも、本質が意味をもたない、すべてが表層によって構築される社会として描かれていると考えられる。物語の一端を担う社交界の中心にいるヴェニアリングは“veneer”という語を連想させる名前の通り、うわべを取り繕った人物として描かれている。晩餐会に人々が集う目的は「ヴェニアリング夫妻と食事を共にするためではなく、互いに食事をするため」であり、レイディ・ティピンズ（Lady Tippins）によれば「誰もヴェニアリングの正体を知る者はいない」という（*OMF* 249, 618）。つまり、社交界の人々の興味はヴェニアリング自身ではなく、彼らがもつと思われる財産や地位、そしてそこに顔を出す人々との繋がりにあるのだ。他方で、ニコディーマス・ボフィン（Nicodemus Boffin）の元に集まる人々の目的もまた、彼がハーマン老人（Old Harmon）から相続した「黄金のゴミ」―金である（209）。このように『互いの友』におけるミドル・クラスの社会は地位や財産、知人関係のように外側から見えるものに価値を見出すことで成立し、そのなかにいる個人の本音や本質は意味をもたない。つまり、個人と個人の表層的な関係性によって構築された見せかけの社会であるといえる。

見せかけの社会は本作品の中心人物であるジョン・ハーマン（John Harmon）にとって非常に好都合である。個人の本質が無視され、表層でのみ判断されるということは、個人が自己の望む姿で社会に所属することを可能にする。ゆえに、死んだはずのジョン・ハーマンがジューリアス・ハンドフォード（Julius Handford）とジョン・ロウクスミス（John Rokesmith）という偽名を用いることで社会に居場所を得ることができるのだ。ディケンズはミドル・クラスの社会をこのように描くことで『互いの友』において表層対本質という単純な二項対立からの脱却を試みているのである。

3. 見せかけの関係性を構築するためのゴシップと個人の商品化

見せかけの関係性を構築するための手段としてディケンズはうわさ話、つまりゴシップの機能を利用している。ハーマン殺人事件の話は新聞や立て看板を通じて土地を超え、階級を超え、瞬く間に世間に広まっていく。パトリシア・マイヤー・スパックス（Patricia Meyer Spacks）はゴシップの目的を連続体と捉え、両極に他者を貶めるためのゴシップと親密な関係を築くためのゴシップを、そして、それらの中間に社交のためのゴシップを想定した。社交のためのゴシップとは、悪意も好意もない相手との関係性を築くために、自己の内面を明かすこともなく、他者を傷つけることもない、当たり障りのない話題をやり取りすることである。ヴェニアリングの社交界で提供されるハーマン殺人事件の話題はまさにこの種類のゴシップであるといえるだろう。事務弁護士としてハーマン殺人事件に関わるモーティマー・ライトウッド（Mortimer Lightwood）はこの話題をヴェニアリングの晩餐会で提供するが、聞き手である社交界の人々は心からこの話題の内容に関心を寄せているわ

けではない。「ヴェニアリングはハーマン殺人事件で大成功を治め、それによって得た名声を幾人もの真新しい友人を作るために活かした」と語り手が述べているように、彼らにとってこの話題は自己を切り売りすることなく他者と関わるための道具であり、見せかけの関係性を維持するための潤滑油である（*OMF* 134）。『互いの友』で描かれるミドル・クラスの見せかけの社会はうわさ話によって構築されているのだ。

他方で、うわさ話には個人を商品化するというもう一つの特徴がある。うわさの対象となる人物の名前がやり取りされることにより、個人の名前と実体が切り離されるのである。ロウグ・ライダーフッド（Rogue Riderhood）はハーマン殺人事件のうわさ話のなかで自分の名前だけが広まっている状況に直面し、まるで自分の名前が「公共財産」のようになっていると嘆く（551）。ジョン・ハーマンは人々がハーマン殺人事件の話を語り続けることで「生きながらに死んだ男」となる（373）。このように、ライダーフッドやジョン・ハーマンの名前は実体から離れ、うわさ話のなかで人々の間を好奇心や利己心、虚栄心と引き換えに流通していく。この現象を個人のアイデンティティの商品化と呼ぶことができるだろう。

4. 結末の再解釈―個人の商品化という現象とディケンズ

個人の商品化という題材は、本質が意味をもたないミドル・クラス社会の描写とともに『互いの友』の現代的側面を示す要素であるが、同時に、本作品の結末を再解釈するための鍵にもなる。物語の中盤から始まるボフィンの芝居という見せかけを利用してベラの本質を暴こうとするロウクスミスの行動、そして、真実がベラに明かされ、ハンドフォード、ロウクスミスという偽りのアイデンティティがジョン・ハーマンという一人の人物に集約していくという過程によって、本作品のなかに虚構か本質かという従来の二項対立が現れる。それまで展開されてきた見せかけ重視の世界観を覆すようなこの結末はこれまで批判されることも多かった。しかし、第 2 巻第 13 章に描かれるロウクスミスの独白から読み取れる彼の行動原理は、この結末の新たな解釈の可能性を示唆する。独白のなかでロウクスミスは、自分の正体を明らかにすることは「父親の金を手に入れること、そしてその金で自分の愛する美しい女性を買う（buy）ということ」であると語り、そのことはジョン・ハーマンの名前を捨てるという決断に至る理由の一つとなる（*OMF* 372）。金と引き替えに女性を手に入れるという考え方は女性の商品化と捉えられ、それを拒否するロウクスミスの行動は商品化への抵抗とみなすことができるだろう。これがロウクスミスの行動原理であるといえる。ショーン・グラース（Sean Grass）は 1860 年に出版されたディケンズの「外国への渡航」（“Travelling Abroad”）という記事のなかに、資本主義の時代において人体や主体としての自己の一部までもが商品化されるという現象が起こることに対するディケンズの不安を見出し、その感覚が『互いの友』の描写に反映されていると指摘した。グラースは川に浮かぶジョン・ハーマンやギャファー・ヘクサム（Gaffer Hexam）の死体の商品化について論じているが、同じように、ベラを金で買うような行動は拒否するというロウクスミスの行動原理についても、人間の商品化という現象へのディケンズの不安や否定的な感情が反映されていると考えることが可能である。このようにして、商品化という観点から『互いの友』の賛否ある結末を再解釈することができるのだ。

5. おわりに

ディケンズは見せかけと本質、虚構と真実、そして個人の商品化という現代的な現象を理解するとともに、そうした新しい現象についての不安も抱いていた。「我々のこの時代に」という冒頭の一文は本作品が同時代の社会を描いたものであることを示しているが、ディケンズは同時代の社会をつぶさに観察し、それを本作品に反映させたのである（*OMF* 1）。その結果として、ミドル・クラスの見せかけで構築された社会やうわさ話を通じた個人のアイデンティティの商品化、そしてベラとロウクスミスの結婚という大団円の結末を描くことで、その両方の感覚を『互いの友』に描きこむことに成功したのである。

引用文献

Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. Edited by Michael Cotsell, Oxford UP, 2008.

Grass, Sean. *The Commodification of Identity in Victorian Narrative: Autobiography, Sensation, and the Literary Marketplace*. Cambridge UP, 2019.

Knoepflmacher, U. C. *Laughter and Despair: Readings in Ten Novels of the Victorian Era*. U of California P, 1971.

Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: The World of His Novels*. Harvard UP, 1958.

Spacks, Patricia Meyer. *Gossip*. U of Chicago P, 1986.

Tsutsui, Mizuki. “The Morality of Fiction-Making in *Our Mutual Friend*.” *Dickens Quarterly*, vol. 39, 2022, pp. 159-75.